

国語

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、省略した部分があります。)

みなさんは「自由」と聞いて、どんな状態をイメージしますか。おそらく多くの人にとって、自由であるとは、^①チョツ坎的に「選択肢が多い」こととしてイメージされるかと思っています。

A 「AとB」、この二つのどちらかしか選べない状態よりも、「A B C D」という四つの選択肢から選べるほうがより自由度が高いと感じる。衣食住で考えてみるとわかりやすいでしょう。どんな洋服を着るか、どんなものを食べるか、どこに住むか。私たちは選択肢が多いことを、より望ましい状態であると考えがちです。そういった意味では自由にとって「お金」は重要なファクターかもしれません。じつさい、お金によって可能になることはあるでしょうし、お金によって選択肢が広がることも多々あります。

とはいっても、「あなたに今日から完全な自由を与えますから何でもしていいですよ」といわれたら、¹ほとんどの人は困ってしまうのではないだろうか。これはわたしの想像ですが「なんでも自由にしたい」といわれたとき、人が考える「自由」のイメージはじつは似通っているのではないかと思います。あえていい切ってしまう、自由をめぐる人間の想像力はそれほど自由ではない。つまり、私たちが本当に自由になるためには、²そもそも自分が考える「自由」のイメージから自由になることが必要なのです。

わたし自身の経験からお話すると、自由のイメージを拡大し、本当に自由になるために必要なことは「何かを学ぶ」²ことだと思っています。わたしは「美学」という、哲学と芸術にまたがる分野を専攻しています。より平たくいうと、美学とは「言葉」と「感覚」の両方にかかわる——何かを見たり聞いたりして感情が動かされることと、それについて考えて言葉にすること——学問です。わたしがこの美学を一生の仕事にしようと思った理由は、わたし自身が哲学や芸術を通じてはじめて「自由」という感覚を得たからでした。もちろん何によって自由を感じるかは人によって違うと思いますが、今日はわたしの経験も交えながら「自由」についてみなさんと考えていきたいと思っています。

みなさんのなかには、学校や塾の勉強がつまらないと感じる人もいるかもしれません。しかし、何かを学ぶというのはかならずしも学校の勉強のことだけではなく、みなさんが夢中でやっている趣味やスポーツなども、広い意味では学びのひとつです。

ここでいう「学ぶ」とは、まわりから何かを吸収すること、自分でやってみること、つまりインプットとアウトプットの両方にまたがるものだと思います。そのうえでいえば、学ぶということは、本当は窮屈な^{きようくつ}ことじゃない。むしろ、学ぶことを通じて、私たちは³自由になっていきます。

なにかを学ぶうえで、まず大切なのは「型」を身につけることです。みなさんは学校で英語を教わるときアルファベットから始めますよね。算数なら九九の計算、国語でも、ひらがな、カタカナ、漢字といった基本的な文字を学ばなければ、何も書けるようになりません。

スポーツも「型」から始まります。わたしは小学生のころは近くの道場で剣道を習っていて、中学生のころはバスケットボール部に入っていました。大人になってからはしばらく運動をしていない時期がありました。三〇歳になるころに突然思い立ってボクシングを始めました。そうした経験を思いだすと、バスケットボールであればドリブルやシュートの基本的な型を覚えること、ボクシングであればジャブやストレートといった基本的な^②タゲキのフォームを覚えることが大原則です。反対に、基本的なことをおろそかにしたまま発展的なことをしようとしても、何かうまくいかなくて、基本からやりなおすことになってしまいます。

学びにおいて、この「型」に相当するものがdisciplineです。日本語では大学で学ぶような「学問・研究分野」といった意味で使われますが、この英単語にはもうひとつ「規律・訓練」といった意味もあります。ただ昨今、このdisciplineはネガティブな意味合いで使われることが増えてきました。つまり「規律・訓練」は、本来柔軟な発想にもとづくべき思考を、ある一定の「型」にはめてしまうものである、と。最近ではより自由で、ひとつのやりかたにとらわれない横断的な学習が推奨されていますから、ひとつのことに深く打ち込むdisciplineよりも、interdisciplinary（分野横断）、transdisciplinary（領域横断）といったスタイルのほうがもてはやされる傾向があります。

ただわたしの個人的な印象でいえば、さきほどのスポーツの話と同じく、disciplineを身につけることが結果的に一番近道であることがめずらしくない。分野横断や領域横断は一見聞こえよく響きますが、あくまでも試行錯誤の結果としてそうなるのであって、基礎がおろそかになっていれば決してものになることはない。そしてこの「型」を身につけることこそが、自由になるために必要な最初のステップでもあるのです。

自由とは「型」を身につけたその先にあります。自由とは、ゼロから、つまり何もないところから生まれるものではありません。

B

、私たちは意識する／しないにかかわらず、すでに何らかの「型」にはめられているからです。

二〇世紀でもっとも重要とされるドイツの哲学者、マルティン・ハイデガーの言葉に「世界内存在（In-der-Welt-Sein）」というものがあります。英語で書くと「being-in-the-world」。つまり「世界のなかにいること」という意味です。ハイデガーは、人間は誰でもあらかじめ世界のなかにいる、もつといえ、人間は世界のなかに、自分の意志とは無関係に「投げ入れられている」——これはハイデガーの言葉で「被投性（Geworfenheit, Thrownness）」といいます——といったわけです。

これをいまの話に結びつけると、私たちにはそもそも最初から自由などない、ということになるでしょう。私たちは、自分が「たまたま」おかれた環境のなかで、最初の自己形成をします。つまり私たちの好みや信念もまた、自分が「たまたま」いる環境に左右されているということです。

みなさんはこれまで生きてきて、たくさん努力をしてきたと思います。そのなかで、いまの自分は、自分自身がいちから作り上げてきたものだといった感覚をもっている人も少なくないでしょう。

C

みなさんが自分自身で作り上げてきた「自分」もまた、周囲の人たちから受けてきた影響や、ときには反発によって形成されてきたものではないでしょうか。「影響」というのはそれほど単純なものではありません。家族や友だちの影響で何かを好きになることもあれば、それに対するひそかな反発として、別のものを好きになることだってあるのです。こういつてしまうと、周囲の環境によって「型」にはめられた自分にはそもそも選択の^③ヨチがないように感じられるかもしれませんが、けっしてそうではありません。ここでわたし自身の経験をお話しします。

わたしは小さいころから音楽が好きで、テレビやラジオの音楽番組を熱心に^④シチヨウしていました。中学生になると、クラシック音楽や海外の比較的マイナーなオルタナティヴ・ロックなど、まわりの友だちがあまり聴いていないような音楽を進んで聴くようになります。単純にそういった音楽が自分の好みに合っていたからだともいえませんが、重要なのはそこではない。おそらく、そういう「人と違う音楽を聴いている」という状態が、当時の自分には心地よかった。

若いころにそういった感情に動かされるのは、けっして悪いことではなかったと思います。なぜなら、人は何らかの理由でそうした「背伸び」をしなければ、自分が知らない、わからないものに手を伸ばそうとする機会はなかなか得られないからです。

わたしがそうした未知の音楽に手を出してみようと思ったのは、自分がそれまで聴いてきた音楽はほとんどが同じ、^⑤セマイ枠の

なかに収まっているように感じ、そうではないものを求めたからです。中学生のころのわたしがそれを自覚していたわけではありませんが、それなりにいろいろな音楽を聴いたり、自分でいくらか楽器を弾いたりしていたからこそ、「これじゃない何か」を求めるようになったのだと思います。つまり自由になるためには、まず自分がどういう「型」にはまっているかを自覚することが必要だといえるでしょう。いいかえれば、それはいま自分が身をおいている世界からちよつと抜け出て、別の世界に足を踏み入れてみることです。少し大げさに聞こえるでしょうか。けれどもこの「世界」という言葉はそんなに大げさなものではありません。

さきほどのハイデガーも参照している、ユクスキュルという生物学者がいます。彼が「環世界（Unwelt）」という言葉を使っているのですが、これは私たち人間も、動物も、昆虫も、それぞれ違う世界を生きているという考えかたです。なぜならどの生物も、備えている感覚が違うからです。この宇宙はたしかに物理的にはひとつかもしれない。でもその感じかたが違えば、それはもう別の世界である。だから私たち一人ひとりも、ふだん馴染（なじ）んでいる環境の外に出れば、そこにはまったく別の世界が広がっているともいえるわけです。

（出典 星野太「自由のためのレッスン」『高校生と考える未来への想像力』左右社による）

75

問一 〰線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A～Cに入る言葉として、最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ つまり ウ たとえば エ もし オ もちろん

問三 線1「ほとんどの人は困ってしまう」とありますが、なぜですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 完全な自由を与えられても、人それぞれの自由のイメージが異なっているから。
イ 自由にしていいと言われても、自由に対して多様なイメージを持っていないから。
ウ 完全な自由を与えられたところで、それを実行するための金銭的な余裕がないから。
エ 自由にしていいと言われると、かえって何をしていいのかわからなくなるから。
オ 完全な自由を与えられたのに何をすべきか考えること自体が、すでに自由ではないから。

問四 線2「何かを学ぶ」とありますが、それによってどうなりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 感覚と言葉を研ぎ澄ませることで、自由のイメージを拡大する。
イ 「型」を身につけて基本を大切にすることで、自由を獲得する。
ウ 趣味やスポーツをがんばることで、夢中になれることを見つける。
エ 周囲から何かを吸収しながら自分でやってみることで、自由になる。
オ 感動を言葉で表現しようと努力することで、自由を実感できる。

問五 線3「まず大切なのは『型』を身につけることです」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「型」の習得は柔軟であるべき思考を限定するが、それがかえって何をすべきかの指針を与えるから。
イ スポーツで基本が大切にされるのと同様に、学びにおいても基礎を学ぶことが重要だと考えられるから。
ウ 「型」を身につけることは基本を習得することであり、それは自由になるための重要な最初の段階であるから。
エ 学びにおいて基本を身につけることは、やがて分野横断や領域横断につながる可能性を持っているから。
オ 「型」を学ぶことをおろそかにしてしまうと結局基礎からやりなおすことになり、かえって遠回りになるから。

76

問六 ―線4「私たちにはそもそも最初から自由などない」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自己は自分自身でたくさんの努力をして作り上げるものであるが、実際には家族や友だちの影響を受けて作り上げるものだから。
- イ 人間は意識する／しないにかかわらず「型」にはめられているので、常に世界の中に投げ入れられている状態だと言えるから。
- ウ 自己は自分自身でいちから作り上げてきたと思いたいが、周囲の環境に反発することによって作りあげられてきたものだから。
- エ 人間が「世界内存在」であるならば、好みや信念もまた「たまたま」いる環境に左右されていると判断できるから。

オ 自己は自分自身で作り上げてきたと考えがちであるが、偶然置かれた環境で他者の影響を受けながら作りあげられるものだから。

問七 ―線5「自分がどういう『型』にはまっているかを自覚すること」とありますが、これと同じ内容を示す箇所を本文の18行目より前から二十四字で抜き出し、最初の五字を答えなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問八 筆者は「自由」について、どのように考えていますか。本文全体を踏まえて百字以内で説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、一部表記を変えた部分があります。)

翌朝。耳の後ろにじつとりと汗をかきながら学校へ向かう。

口の端には瘡蓋^{かさふた}ができてしまったが、頬の腫れ^はは引いた。母は帰ってきた私の姿を見てびっくりしていたが、転んでしまったと嘘をついた。雀子^{すずこ}も親には知られたくなかったようで、学校側も生徒同士で解決させるということで納得した。高校生。もう親が子供の喧嘩^{けんか}に出てくる年齢ではない。

憂鬱^{ゆううつ}を抱えてB組の前に立つ。結局、クラスには昔のことが知られてしまった。軽蔑されるだろうか。落胆されるだろうか。意を決して、教室に入る。

賑やかな音。談笑^{だんぎょう}と軽口。その溢れ返る声たちが全て自分を嘲^{あざわら}っているように聞こえて、私は俯^{うつむ}きながら自分の席へ向かう。椅子に座り、鞆^{かばん}を机にかけると、茶色のスカートが二つ目の前に並んだ。ゆっくりと顔を上げる。千夏と彩美がそこにいた。

「おはよー」

そう笑う二人の顔はいつもと変わらないように見える。私もぎこちなく「おはよう」と返す。いつもと変わらないその表情が、だからこそ余計に不安^{あふあん}を煽^{あお}ってくる。

彩美が、机に両手を載^のせてその場にしゃがみ込んだ。「昨日は大変だったね」と言ってくる。私は唇^{くちびる}を嚙^かんだ。

「ねえ、和香が嫌じゃなければなんだけど」千夏もその隣にしゃがむ。「よかったらちゃんと聞かせてよ。あんな中途半端な感じじゃなくて」

私は少し逡巡^{しゆんじゆん}して、そして口を開く。

二人に全てを話した。自分がかつて太っていたこと。そのせいでいじめに遭っていたこと。そしてある日、いじめっ子を椅子で減多打ち^{へんたうち}にし、逃げ出すような形で転校したこと。そのとき一緒にいじめられていたのが大房雀子^{おほふさずこ}だったということ。この過去がバラされてしまうのが怖くて、今までずっと雀子に逆らえなかったということ。

私が話し終えると、彩美が「ふうん」と気の抜けた相槌^{あひづち}を打った。

「なんか、思ったより大したことなかった」

「ね。私もそう思った」

二人は口々に言い合う。私は思ってもみなかった反応にたじろぐ^a。

「でも、私すごい太ってたし……殴ったのも、事実だし」

「えっ、てか、そりゃ殴るでしょ！ そんなことされてたんだもん。私でも殴るわ」
彩美がふざけて拳を前に突き出す。

「それに、太ってたから何？ って感じ。むしろ痩せて、そこから頑張って体型維持してるんだから、逆にかっこいいよ」
「かっこいい。千夏の言葉が耳の奥で響く^④。また言われてしまった。可愛いと言われるよりも面映ゆくて、なんだか嬉しい気がする。」

「でも、思ったんだけどさ。和香には思い出したくない過去だったけど、大房さんはそういうわけでもなかったのかもね」
ぽつりと呟く千夏に「どういうこと？」と訊き返す。

²「本当に忘れたいくらい嫌な過去なら、私だったらそのときを知ってる人とは一緒にいたくないもん」
思わず、雀子の方を見る。いつも甲高い声を撒き散らしている彼女は、今日は静かに席に座り、スマホをいじっていた。

今まで雀子は、どんな気持ちでいたんだろうか。ふと私はそんなことを考える。私は当時、いじめっ子を殴り、そして学校を追い出された。それは言い換えれば、あの地獄から抜け出せたということだ。

けれど、そこに残された雀子は、一体どうやって残りの学校生活を過ごしたのだろう。身を寄せ合う相手もおらず、たった独りで、あの苦しみを味わい続けたというんだろうか。どんな思いで、いつも笑っていたのだろうか。

一度も想像したことがなかった。毎日一緒にいたのに、本当は何を思っているのか、興味を抱くことすらしなかった。

雀子の声を聞かないまま、昼休みになる。

私は立ち上がった。そして、生徒たちの群れをすり抜け雀子のもとへ向かう。机を挟み向かい合うようにして立つ。周りがわずかにどよめいて、好奇や不安の視線が突き刺さる。

雀子がゆつくりと顔を上げる。私は口を開く。

「一緒に、お昼食べよう」

そしてどうにか押し上げたような口角で、「べつにいいけど？」と笑った。

蒸し暑い上に風が強く、中庭には誰も人がいなかった。額に浮かぶ汗を拭い、包みが飛ばされないようにしながら弁当箱を開く。いつもは喧しく^{やかま}い言葉投げつけてくる雀子が、今日は黙々とおかずを口に運んでいる。私の方も何を喋^{しべ}っていいかわからず、会話を交わさないまま完食してしまった。空になった弁当箱を見て、雀子がぶ厚い唇を歪めた。

「あっ、今日はちゃんと全部食べたんだあ。偉いじゃーん」

棘のある言い回しに、私は溜息をつく^{ためいき}と、弁当箱に蓋をする。

「雀子さ。そうやって嫌味^{いやみ}っぽいこと言うの、やめた方がいいと思うよ」

私の指摘に、雀子の頬がびくりと動いた。

「それ、雀子の癖なのかもしれないけどさ。言われた方はあんまりいい気分しないと思うから」

雀子の箸を握る手に、ぎゅつと力が籠るのが分かった。もしかしたらそのままそれを首筋に突き立てられるんじゃないか、というスプラッタな想像が頭に浮かんできてしまう。

「……みんな、やってるじゃん」

絞り出すような声が聞こえてきた。箸の先が、ぶるぶると震えている。

「みんな、人のこといじって、笑ったりしてるじゃん。そうやって仲良くしてるじゃん。なんでみんなはよくて、私は駄目なの」
私はその言葉に、思わず驚く。雀子にとって皮肉めいた台詞は、誰かを傷付けるためではなく、コミュニケーションの一部だったのだ。

「私だって分かってるよ、私のやり方じゃきつといけないんだろうなって。でもできないんだもん。ちゃんとしたやり方が分からないんだもん。それでも、和香だけは、笑ってくれてると思ってたのに」

雀子は震える語尾を誤魔化^{ごまか}すように、残っていた白米をかつ込んだ。私は何と返していいかわからず、その様子を見つめる。汗³がたたりと眉間に垂れる。

もしかしたら。もしかしたら雀子は、私が思うよりも、したたかでもふてぶてしくもないのかもしれない。

弁当を全て平らげた雀子が、もう一つの小さなタッパーを開けた。そこには、桃が入っていた。甘いシロップに包まれて艶やかに光る、缶詰の黄桃だった。幼い頃の記憶が蘇^{よみがえ}り思わず凝視する私に、雀子が「食べる？」と訊いてくる。私はこくりと頷く。

桃の入ったタッパーを差し出される。箸の先を舐めると、半月の形に切られた桃を嚥^のもうとする。が、つるりと滑り、そのまま

箸を落としてしまった。雑草の上にくろりと転がる。

「あ、あー。やっちゃった」

「もー、何やってんのよ。桃用にフォークあるから、和香はこれ使いなー。私はお箸で食べるから」

「う、うん。ありがとう」

渡してきた小さなフォークを受け取る。雀子がいつものように、にやりと皮肉っぽく笑った。

「ほんと、和香は私がいけないと駄目だよねえ」

甲高い声が、中庭に響く。

思い出したことがあった。あの夏の日、汗をかきながら、櫟かしの木を眺めながら桃を食べたあのとき。

どうして、ただの缶詰の桃なのに、こんなに美味おいしく感じるんだろう。その疑問に、私たちは一つの答えを出した。

きつこうやって、並んで外で食べるから、おいしいんだろうね。

何の根拠もない、子供っぽい結論だった。でも雀子は、ずっとそれを覚えていたのだろう。

明日もたぶん、雀子は言う。一緒にお昼食べよう、と。そしてまた、皮肉めいたことを口にする。その隣で私は笑っている。い

つものように。けれど、自分の意思で。

⁵「うん。そうかもね」

私も笑いながら答えると、フォークで桃を突き刺し、大きく口を開けた。血の固まった口の端が、ぴりりと微かすかに痛んだ。

(出典 君嶋彼方『春のほとり』講談社による)

注 スプラッタ：残酷なシーンを見せ場とするホラー映画。

問一 ……線①～⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 線 a・b の語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。	
a たじろぐ	
ア 困る	イ 緊張する
	ウ ひるむ
	エ あわてる
オ 驚く	イ 強い
	ウ 怒りっぽい
	エ 乱暴だ
オ 不愛想だ	イ 冷たい
	ウ 怒りっぽい
	エ 乱暴だ

問二 線 a・b の語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

問三 本文には次の一文が抜けている。この一文が入る箇所を本文中から探し、直後の五字を答えなさい。(ただし、句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

雀子が、驚いたように目をみはった。

問四 線1「私もぎこちなく『おはよう』と返す」とありますが、このときの「私」の気持ちを七十字以内で説明しなさい。

問五 線2「思わず、雀子の方を見る」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 雀子が自分たちの会話に聞き耳を立てているのではないかと思い、不安に駆られている。
- イ 千夏が自分よりも雀子の気持ちを推し量る発言を始めたことに、激しく動揺している。
- ウ 自分が学校を追いつかれたあとの雀子の苦しさを理解して、雀子に謝りたくなっている。
- エ 周囲からの好奇な視線に耐えきれず、雀子と一緒にこの場から逃げ出したいと思っている。
- オ いつも一緒にいる雀子の気持ちを一度も考えなかったことに気づき、衝撃を受けている。

問六

――線3「汗がたりりと眉間に垂れる」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 冗談で皮肉めいた台詞を口にしていただけだったので、ここまで和香が不快な思いをしているとは思わなかったと雀子に言われ、雀子の自分勝手な発言に呆然としている。
- イ みんなも皮肉めいた台詞を口にしてるのに、自分だけに注意するのはおかしいと雀子から責められ、語尾を震わせて怒る雀子にどう謝ればよいかわからず戸惑っている。
- ウ 皮肉や嫌味はコミュニケーションを取るための一つの手段なのに、和香が自分のやり方を否定するのは許せないと言われ、無神経な発言をしたことを後悔している。
- エ 皮肉めいた台詞では仲良くできないとわかっていても、和香だけは自分の気持ちを理解してくれていると思っていたと雀子に言われ、どう返答すればよいかわからず困惑している。
- オ 雀子がみんなとコミュニケーションを取るために、わざと皮肉めいた台詞を口にしていたことを知り、雀子のひねくれた性格にうんざりして、会話を続けることに嫌気がさしている。

問七

――線4「缶詰の黄桃」とありますが、これは本文中で何を象徴していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 二人のみずみずしい感性。
- イ 雀子の、私に対するひたむきな思い。
- ウ 二人がともに過ごした幸せな時間。
- エ 二人の美しくもはかない友情。
- オ 私の、雀子に対する深い優しさ。

問八

――線5「うん。そうかもね」とありますが、このときの「私」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 喧嘩をして傷ついたが、これまで通り自分が笑ってがまんすることで、わがままな雀子と良好な関係を保っていきたいと思っている。
- イ 自分の過去を暴露したにもかかわらず、何もなかったかのように振る舞う雀子に嫌気がさし、自分から雀子との関係を解消しようと思っている。
- ウ 今まで雀子のが怖くて逆らえずにいたが、これからは自分の気持ちをきちんと伝えて、雀子と対等な関係を築いていきたいと思っている。
- エ 幼い頃から雀子がそばにいてくれたことを思い出し、雀子の気持ちを考えずに、一方的に雀子を傷つけてしまったことを申し訳なく思っている。
- オ 雀子と喧嘩をしてしまったが、二人で一緒に過ごす時間の大切さに気づけたことで、これからは自分の意思で友情を育んでいきたいと思っている。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（出題の都合上、一部表記を変えた部分があります。）

（法名は空海）

（書の巧みさ）

（天皇がお手本としている筆跡を）

（お見せになりました）

嵯峨天皇と弘法大師と、つねに御手跡をあらそはせ給けり。或時、御手本をあまた取出させ給て、大師に見せまゐらせられけり。

（特に優れた）

（おっしゃったことには）

（唐人が書いた筆跡である）

其中に殊勝の一卷ありけるを、天皇仰ごとありけるは、「これは唐人の手跡也。其名をしらず。いかにかくはまなびがたし。」¹め

（たいそう大切にしているご様子であった）

（充分に天皇にお話させてから）

（書いたものでございますが）

でたき重宝なり」と、頻に御秘蔵ありけるを、大師よくよく言はせまゐらせて後、「是は空海がつかうまつりて候物を」と

（申し上げたのですが）

（現在）

奏せさせ給たりければ、天皇更に御信用なし。大に御不審ありて、「いかでかさる事あらん。当時書かるる様に、はなはだ異なる

（はしごを立てても）

（天皇のお言葉）

²

（軸を紙から外して）

なり。はしたててもおよぶべからず」と勅定ありければ、

X

「御不審、まことにその謂候。軸をはなちて、あはせ目を

（某年某月某日）

（これを書す）

観覧候べし」と申させ給ければ、則はなちて御らんずるに、『そのとし其日青龍寺において書之、沙門空海』と記せられたり。

³

（それにしても）

（ぶつりと）

天皇、此時御信仰ありて、「誠に我にはまさられたりけり。それにとりて、いかにかく当時のいきをひくのごとし。日本は小国なれ

と尋仰られければ、「其事は国によりて書かへて候也。唐土は大国なれば、所に相応していきをひかくのごとし。日本は小国なれ

ば、それにしたがひて、当時のやうをつかうまつり候也」と申させ給ければ、

Y

おほきに恥させ給て、そののちは御手跡

あらそひなかりけり。

（出典『古今著聞集』による）

問一 線a「まゐらせ」・b「つかうまつり」・c「かはり」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二 線1「いかにもかくはまなびがたし」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア とてもこのようにまねて書くことはできない。

イ どうかしてこのように学びたいものだ。

ウ そもそもこのような筆跡を学ぶ必要はない。

エ どうしても書いて学ぶ気にはならない。

オ 何としてもこのように学ぶのがよい。

問三 線2「いかでかさる事あらん」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どのようにして空海が書いたのであろうか、分からない。

イ どうかして空海のように上手に書いてみたいものだ。

ウ どうかして空海は昔と同じように書いてみたのだろうか。

エ どうかして空海が書いたものであろうか、そんなはずはない。

オ どうやって空海がそのように上手に書いたのか、知りたい。

問四 線3「天皇、此時御信仰ありて」とありますが、なぜ天皇は信用したのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 軸の書は青龍寺で書いたものと記されており、その寺に仕える空海の作だと思ったため。
- イ 天皇が軸から紙を外して合わせ目を見ると、確かに空海が書いたという表記があったため。
- ウ 青龍寺に奉納する掛け軸の書を、仏に仕える身である空海がその年に書いたと聞いたため。
- エ 天皇が自分の書より優れているため、書の名手である空海の作に違いないと確信したため。
- オ 信仰心が厚い天皇は、青龍寺にある掛け軸に疑いを持つべきではないと思い直したため。

問五 線4「当時のやう」とありますが、どのような意味ですか。最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本の当時の平穩な様子
- イ 唐土の当時のおおらかな様子
- ウ 勢いをおさえた現在の書風
- エ 昔と変わらない現在の書風
- オ 勢いのある現在の書風

問六 X・Yにあてはまる人物の組み合わせとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア X…天皇 Y…天皇
- イ X…天皇 Y…大師
- ウ X…大師 Y…大師
- エ X…大師 Y…天皇

問七 本文の内容として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本と唐土の書風の違いを学ぶことによって、真の書家になれると天皇が悟った。
- イ 天皇は大師と書で競争していたが、筆の勢いが大師に劣ることを恥ずかしく思った。
- ウ 唐土の書家の手本は誰の作か結局分からなかったが、天皇は大切に保管し続けた。
- エ 天皇は唐土の人が書いた優れた書の手本を大師に見せて、伝統的な書風を伝授した。
- オ 天皇が手本としている特に優れた筆跡は、本当は大師が唐土で書いた作であった。

— 11 —

